

声優と統計とシンギュラリティ

—声優統計の目指す未来—

@MagnesiumRibbon

ビッグデータやデータサイエンティストなどというバズワードが一周回って一般人からも嘲笑されるようになった昨今、統計や機械学習、特に人工知能界隈で熱い最新のバズワードが“Singularity”だ。シンギュラリティ、と読むこの語はまださほど流行っていないしヘソフォルテとはまったく関係が無いので意味を簡単に説明しておく。

辞書を引けば分かるように、Singularity は本来「非凡」「奇妙」「特異点」などの意味を持つ。人工知能研究における Singularity とはこのうち特異点、特に“技術的特異点”を意味する。技術的特異点とは何か。多少定義にズレがあることはあるが、簡単に言えばコンピュータの“知能”が人間を凌駕するタイミングのことを称して人工知能の技術的特異点と呼ぶ。有名な専門家がこの特異点が 2045 年だろうと予測したことで盛り上がりが生じている。

さて、声優統計にとっての技術的特異点とはなんだろうか。メンバによっては意見を異にするものもあるかもしれないが、私なりに真面目に考えてみたところ、それは“コンピュータによる音声合成が声優を完全に置き換える日”であろうと考えるに至った。声優の機能とはすなわち、聴いたものが特定の感情を想起するような声色を魅力的な声質で発することだと言える。はっきり言って後者（音声合成）はそう遠く無い未来に人工物で完全に代替できるレベルに到達するだろうと筆者は考えている。声優にとってのナレーション業は消滅するだろう、収入面ではこれだけでも大問題だ。だが本当の問題は前者、大雑把に言うところの演技・お芝居であるが、明らかに演技をすることは“知能”のサブセットである。つまり、2045 年の予測が正しければ声優 Singularity はそれより早く到来する。現在 JK 声優などと呼ばれているような層は、生涯声優として生きる事はできないということになる。

さて、人工知能研究における“知能”の定義こそが Singularity にまつわる議論において問い直されているように、声優統計的 Singularity の議論は“演技”とは何か、という根源的問いを我々に投げかけている。だが我々の営みはその遥かに手前、“声優”とは何か、というレベルで停滞している。2045 年問題を嘲笑することは容易い。だが、現実に制御できないテクノロジーの波が声優をロストテクノロジーにしてしまうのならば、我々は行動しなければならぬのではないか。

我々の研究が“声”そのものを避け、周辺現象から声優を捉えようとしていること自体、声を統計的に暴き出すことによる声優 Singularity の到達を少しでも遅らせたいという無意識の願望の表れとは考えられないだろうか。¹だがしかし、我々がやらなかったとしても、いずれ誰かがやってしまうことには違いない。ならば我々が、声優を誰よりも愛すると自負する我々こそが、声優の声そのものを暴くしかないのではないか。

いずれ声優 Singularity に到達するその日のために声優統計はここに宣言する。我々は、声優を殺すためではなく、声優を守るためにこの技術を用い、総力を結集して声優や演技とは何かを明らかにする。声優を特別と思わない人間たちがその技術を手にするより前にそれを解明し、できれば声優が高みを目指すための助力としてそれを使えるようにすることが、我々の望む未来の姿である。

¹ どう見ても後付けの言い訳だ。